

小峰城ふもとやま話

第十六話
前御門と
発掘調査

今回は、前御門の発掘調査についてご紹介します。

前御門は、本丸の正面口にあたり、本丸を守る重要な門でした。

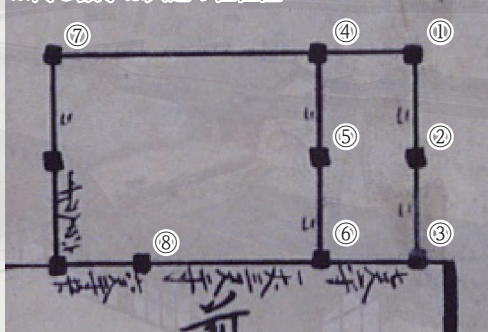
復元事業に先立ち、平成2年度に実施された発掘調査の結果、建物の基礎となる8個の礎石が確認されました(図右)。礎石は、一辺40×60cmの正方形の石材と、門の正面となる東側では、長辺が1mほどの長方形の石材が使われていました。礎石間の距離から、前御門は幅8.2m、奥行き4.2mの大きさであることが確認できました。石材は、石垣と同じ安山岩質溶結凝灰岩(通称白河石)が使われています。

江戸時代の小峰城の門や建物の図面をまとめた『白河城御櫓絵図』(図左)には、10か所に柱が描かれており、発掘調査で確認した礎石の配置と概ね一致することが確認できました。

また、門の内部には、排水溝と考えられる板石を並べた溝跡が確認されています。

前御門は、これらの調査結果と御櫓絵図をもとに、平成6年に木造で復元されました。

※同じ数字は共通の柱位置



▲前御門の平面図『白河城御櫓絵図』より



▲発掘調査で確認した遺構

渋沢栄一×松平定信

南湖を彩る系譜

第七回
東京の恩人
松平定信

今回は、定信の七分積金の遺産で行われた事業を紹介します。明治になり文明開化が進むと、乗合馬車や人力車などの新しい交通機関が生まれ、江戸時代とは比較にならないほど往来が多くなりました。それに伴い道路の修繕や拡張が七分積金によって行われたのでした。

修繕や建設が必要なのは、道路だけではなくありません。東京中の橋・水道も同様でした。古い木造のため傷みが激しく、これも多額の費用をかけて修繕されました。

東京府は夜の街を明るくするため、瓦斯燈を設置することにしました。明治6年(1873)にフランス人技術者ベルグランを招聘して工事が始まり、翌7年12月に京橋以南の銀座煉瓦街に灯されました。8年には、京橋から万世橋までに百基、常盤橋から浅草橋・元柳橋・両国広小路までに53基の瓦斯燈が設置されました。

明治5年に学制が公布されると、全国に学校がではじめます。東京府内の96小区・郷村19小区ごとに一校ずつ小学校が設立されることになりました。後に文部大臣となった森有礼の発案で、商法講習所(後の一橋大学)がつくられます。経済

と商業教育の重要性を認識していた渋沢栄一も賛同しました。東京府庁舎は幸町(現在の日比谷)の郡山藩邸跡にありましたが、明治21年に麹町有楽町への移転が決まり、22年から工事が開始、5年の歳月をかけて27年に竣工しました。21年に誕生した東京市と、東京府の庁舎がひとつになり完成したのです。



▲東京府庁・東京市役所
(東京都公文書館所蔵)



▲商法講習所(一橋大学提供)

(文・中山義秀記念文学館 館長 植村美洋)

お知らせ

ラウンジ

りばらん

シリーズ

子育て

保健

くらしの
情報館

手話

高齢者サロン

休日当番医・
無料相談ほか

市長の
手控え帖